

中野遺跡発掘調査概要・V

—— 四條畷市中野所在 ——

1988.3

四條畷市教育委員会

中野遺跡発掘調査概要・V

—— 四條畷市中野所在 ——

1988.3

四條畷市教育委員会

はしがき

今回の四條畷市中野遺跡調査は、国道163号の拡幅工事の前段調査として、浪速国道工事事務所より受託したものである。調査地点は国道163号線と旧東高野街道の交叉点東側の地域であり、昭和62年12月より調査を開始して63年2月に至る期間の調査であった。

調査の結果、遺構としては古墳時代5世紀を中心とする土壙、井戸を検出した。また、この時期の土師器壺・壺・高杯・須恵器壺等の遺物が発見されている。さらに馬頭骨も発見され、中野遺跡全容解明に大きな内容を加えることとなった。

また上層からは中世の溝、ならびにこの時期の石組遺構も発見され、当地域における中世村落の分布を解明する上に貴重な資料となった。

調査に当っては、大阪府教育委員会のご指導、瀬川芳則氏のご助言、浪速国道工事事務所、八幸土木等各位のご協力を得た。ここに厚く感謝を申しあげる次第である。

昭和63年3月

四條畷市教育委員会
教育長 櫻井敬夫

例　　言

1. 本書は四條畷市教育委員会が昭和62年度に建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所より委託を受けて実施した四條畷市中野二丁目870他1筆に所在する中野遺跡発掘調査Vの概要報告書である。
2. 調査は昭和62年12月21日に着手し、63年2月5日まで発掘調査を行い、昭和63年3月31日に昭和62年度調査事業を終了した。
3. 発掘調査は四條畷市立歴史民俗資料館嘱託西尾 宏を担当者とし、調査補助員として吉田安宏、藤井大史、菊池英樹、原本義秀があたった。
出土遺物の整理、実測などについては、西尾、吉田、藤井、野島 稔、脇坂輝実、佐野喜美、三村英代、柴山 交があたった。
4. 本書の執筆は、西尾 宏が行った。
5. 発掘調査の進行、報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・堀江門也、玉井 功、寝屋川市教育委員会・塙山則之、財団法人枚方市文化財研究調査会・曇古文化研究保存会、四條畷市小中学校教育研究会社会科部会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。又、発掘調査については八幸土木工業株式会社の終始懇切なご協力をうけることができた。明記して厚く感謝の意を表したい。

本文目次

はしがき

例　　言

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と環境	3
III	調査概要報告	6
	A 基本層序	6
	B 遺構	6
	C 出土遺物	14
IV	おわりに	21

挿入図目次

第1図 中野遺跡調査地位置図	2
第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図	3
第3図 A、B地区遺構平面実測図	7
第4図 井戸(SE-01)遺構実測図(B断面)	9
第5図 土壌(SK-01)、井戸(SE-01)遺構実測図(A断面)	10
第6図 石組み遺構実測図	13
第7図 自然河川落ち込み(SO-1)遺構実測図	14
第8図 土器実測図	15
第9図 土器、石器実測図	16
第10図 馬上顎歯実測図	17
第11図 土器実測図	20

図 版 目 次

- 図版 1 A地地区調査前全景、B-02地区ピット群
- 図版 2 B-04地区溝、SO-2
- 図版 3 B-00地区SK-01土器出土状況
- 図版 4 B-00地区SK-01断面、SE-01馬齒出土状況
- 図版 5 B-00地区SE-01馬齒と板材出土状況
- 図版 6 B-00地区SE-01土器、A-04地区石組み遺構出土状況
- 図版 7 A-01地区自然河川、土器出土状況
- 図版 8 遺物写真、土器 I
- 図版 9 遺物写真、土器 II

中野遺跡発掘調査概要・V

I 調査にいたる経過

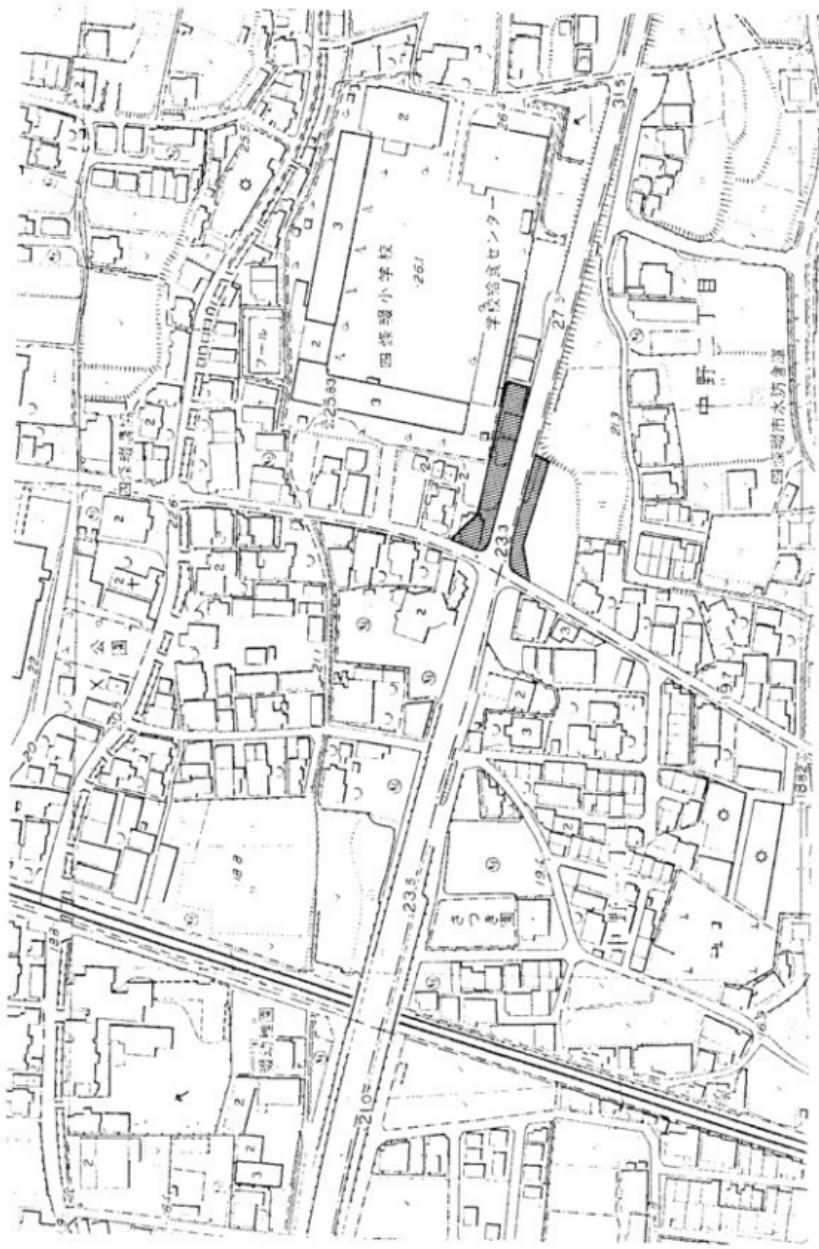
中野遺跡は四條畷市中野に所在し、国道163号が中央部を東西に走る、東西約700m、南北約400mにひろがる遺跡である。

昭和52年度に国道163号とJ R片町線（学研都市線）が交叉する地点の西側、国道163号南側道の発掘調査において、古墳時代中期の大溝から土師器壺・朱塗壺・須恵器蓋杯・器台・滑石製紡錘車・有孔円板・白玉・馬の下顎・1,000点を超える製塙土器片が出土し、鎌倉時代～室町時代の石組み井戸・溝状造構を検出したことから、古墳時代と鎌倉時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが判明して以来、国道163号の拡幅工事、片町線複線化、民間宅地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した結果、古墳時代中期の隅丸方形を呈する周溝、中・後期の大溝、井戸を検出し、最古型式に属する須恵器杯身・多量の漆がつまつたままの把手付塊・手捏ね土器・5,000点を超える製塙土器片・硬玉・滑石製の勾玉・紡錘車・臼玉・有孔円板・木製具・簾編具・馬齒等が出土したことから、広範囲にまたがる古墳時代中期から後期にかけての大集落の存在が確認された。またこの集落は祭祀遺物を多量に出土することから祭祀に特別な関わりをもつ集団ではなかろうかと推測される。

また平安時代の掘立柱建物跡、大溝、鎌倉～室町時代の掘立柱建物跡、井戸9基（曲物だけのもの、石組みと曲物、石組みと樽状のものと曲物、石組みだけの4種類にわけられる）が検出されており、中世においても古墳時代とほぼ同範囲の中世村落の存在が考えられている。このように中野遺跡は古墳時代、中世の集落、古墳時代の祭祀遺跡の解明などに重要な位置を占めているといえる。

今回の調査地は、昭和61年8月22日より同年12月10日まで発掘調査を実施し、南北に走る幅6m、深さ70cmの古墳時代の大溝、井戸1基を検出し、大溝ならびに東から流入している自然流路、井戸から手捏ね土器・滑石製白玉・勾玉・舟形木製品・馬齒などの出土をみた第9次調査地の東に隣接する遺跡である。

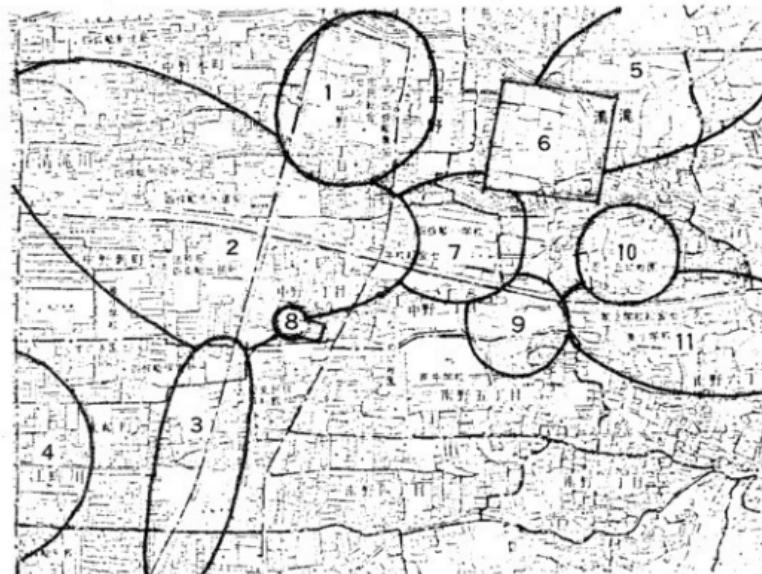
国道163号中野地区拡幅工事に伴ない、建設省浪速国道工事事務所及び各関係部局との協議により、昭和62年10月19日より同月22日まで5箇所のトレンチを設定し、試掘調査を実施した結果黄褐色砂質土層から溝状造構を検出し、須恵器、土師器、瓦器等古墳時代から中世にかけての遺物の出土をみた。調査結果に伴ない再び協議を行ない、昭和62年12月21日より昭和63年2月5日までの予定で本格調査を実施したものである。



II 遺跡の位置と環境

四條畷市は大阪府の東北部に位置し、東は奈良県と境を接し、西は寝屋川市、南は大東市、北は寝屋川市・交野市に接している。

市の東半部は生駒山系支脈の、主として第3期花崗岩よりなる山地帯で、西半部はこれら山地帯から流出した砂礫によって平野部を形成している。またこの山地帯と平野部との間には、大阪層群からなる丘陵、扇状地が細長く南北につらなり、西流する讚良川、清滝川、権現川によって、北から忍ヶ丘丘陵、清滝丘陵に分断されている。当遺跡は清滝丘陵の西端部とそれに続く清滝川と江蟬川に挟まれる平野部に広がっており、行政区画では四條畷市中野本町、中野新町、中野2~3丁目にあたる。



第2図 中野遺跡周辺遺跡分布図 ($S=1/10000$)

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 奈良井遺跡 | 6. 正法寺跡 |
| 2. 中野遺跡 | 7. 四條畷小学校内遺跡 |
| 3. 南野米崎遺跡 | 8. 墓の堂古墳 |
| 4. 雁屋遺跡 | 9. 木間北方遺跡 |
| 5. 清滝古墳群 | 10. 大上遺跡 |
| | 11. 城遺跡 |

今回の調査地は中野遺跡の東端にあたり、標高はT・P・22~23mである。調査地の西端を東高野街道（府道枚方・富田林・泉佐野線）が南北に走り、北100mには古代より栄えていた清滝街道が東西に通じており、交通の要地として栄えていたことがうかがえる。

当遺跡の所在する生駒山系西側斜面にひろがる洪積層の枚方台地は、北から八幡丘陵から南は本市南野丘陵にまでおよぶ広大、低平な丘陵地帯で、北から枚方市船橋川、穂谷川、交野市天の川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川などの中小河川により分断されているが、これら丘陵部、川沿いに数多くの遺跡の存在がしられている。

旧石器時代遺跡としては枚方市楠葉東・津田三ッ池・藤阪宮山遺跡・交野市神宮寺遺跡、四條畷市内ではナイフ形石器・細石器等が出土した讚良川床遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南・有舌尖頭器出土の南山下遺跡などがある。

又、縄文時代遺跡としては米粒文・山形文の押型文土器を出土した交野市神宮寺遺跡、本市田原遺跡が早期の遺跡として知られ、中期では渦巻文・半截竹管文をもつ船元式土器を出土した本市南山下遺跡・砂遺跡や、交野市星田旭遺跡があり、後・晩期には高杯形土器・深鉢形土器・注口土器等多量の土器・石器が出土した本市更良岡山遺跡や岡山南・清滝古墳群周辺遺跡がある。また、枚方市交北城の山遺跡では滋賀里系深鉢形土器を転用した埋甕遺構が検出されている。

弥生時代では前期の大壺、中期の方形周溝墓4基、木棺20基、土器棺1基を検出した本市雁屋遺跡や寝屋川市高宮八丁遺跡などが古代河内渴北端周辺の弥生時代前期の遺跡として知られている。中期では寝屋川市太秦遺跡、枚方市交北城の山遺跡、後期になると枚方市、寝屋川市、交野市の淀川左岸地域において数多く分布するが、枚方市鷹塚山遺跡、山之上天堂遺跡、藤田山遺跡、星ヶ丘西遺跡が代表的な遺跡である。

古墳時代前期では淀川の水運との関連が考えられる枚方市万年寺山古墳、天の川沿いに枚方市藤田山古墳、交野市妙見山古墳が知られ、本市忍岡古墳は全長90mの竪穴式石室をもつ前方後円墳があり、交野市森古墳群も確認されている。中期では枚方市禁野車塚古墳、牧野車塚古墳、本市墓の堂古墳があり、後期に入ると枚方市中宮古墳群、交野市寺古墳群、倉治古墳群、本市清滝古墳群、更良岡山古墳群、終末期では寝屋川市石の宝殿古墳等が存在する。

また、古墳時代の集落跡は本市が多くを占め、岡山南遺跡の大溝内から堅魚木をつけた切妻造りの家形埴輪や木製下駄を出土し、当中野遺跡でも製塙土器、最古型式の須恵器、勾玉、白玉等が多量に出土している。調査地の北に隣接する奈良井遺跡では石敷製塙炉跡および方形周溝遺構の祭祀場が検出され、周溝内から手捏ね土器、人形土製品、動物形土製品、滑石製品が一括出土し、同一溝内から小型の蒙古馬が埋葬されていたことが確認されている。

本調査地に隣接する遺跡としては、北東400mに2基の円墳を検出した前記清瀧古墳群、北東250mに古墳群を削平して建立された白鳳時代の薬師寺式伽藍配置をもつ正法寺跡、北50mに韓式土器が完全出土した四條畷小学校内遺跡、北150mに前記奈良井遺跡、さらに同じ中野遺跡内である第10次発掘調査地西中野遺跡（北西へ約650m）では滑石製臼玉、ガラス玉等約1,500点が出土しており、南西600mに弥生時代遺跡の前記雁屋遺跡が所在している。

III 調査概要報告

今回の調査地点は四條畷市中野2丁目870及び大字中野715地先で、国道163号と東高野街道と交叉する東中野交叉点東の国道163号の南および北側の拡幅部である。調査地は清滝丘陵の南西端の丘陵部縁辺部にあたり、南東1kmには生駒山系の一峰たる飯盛山(316m)が眼前に見えるところに位置している。

区画設定は国道南側をA、北側をB地区とし、国家座標Y軸-32,310mを基準とし、西を00、東へ10m毎に01、02、~07をあて東西の区画を設定した。

A. 基本層序

調査地A地区の北壁断面の基本層序は第Ⅰ層盛土、第Ⅱ層旧表土(旧耕作土)、第Ⅲ層橙色砂質土(旧耕作地の床土)、第Ⅳ層黄褐色砂質土、第Ⅴ層灰オリーブ色砂層、第Ⅵ層は明黄褐色砂質土、第Ⅶ層黄褐色粘質土層となり各層は東から西、北から南へと傾斜している。

第Ⅰ層 盛土、A、B両地区ともに厚さ30~50cmである。住宅建設、国道工事に伴なう盛土である。

第Ⅱ層 旧表土(旧耕作地)15~25cmの厚さがA地区全般に認められたが、B地区で旧住宅の建設、移転に際し、殆んど攪乱をうけており、厚さ3~6cmの旧表土が部分的に認められる。

第Ⅲ層 旧耕作地の床土と考えられるもので、厚さ10cmでA地区全般に認められる。

第Ⅳ層 黄褐色砂質土、厚さ30~90cmでA地区的全域、B地区的東端を除く全域で認められる。調査地上方の遺跡を含む地域を削平し客土整地したと考えられるもので、3層にわかれ、中世、古墳時代、縄文時代の遺物が細片となって包含されており、2層目上位が中世遺構のベースとなっている。

第Ⅴ層 厚さ30~50cmの灰オリーブ色砂層、やや粘質分を含み、極めて硬くしめられておりこの層位が古墳時代の遺構ベース面となっている。

第Ⅵ層

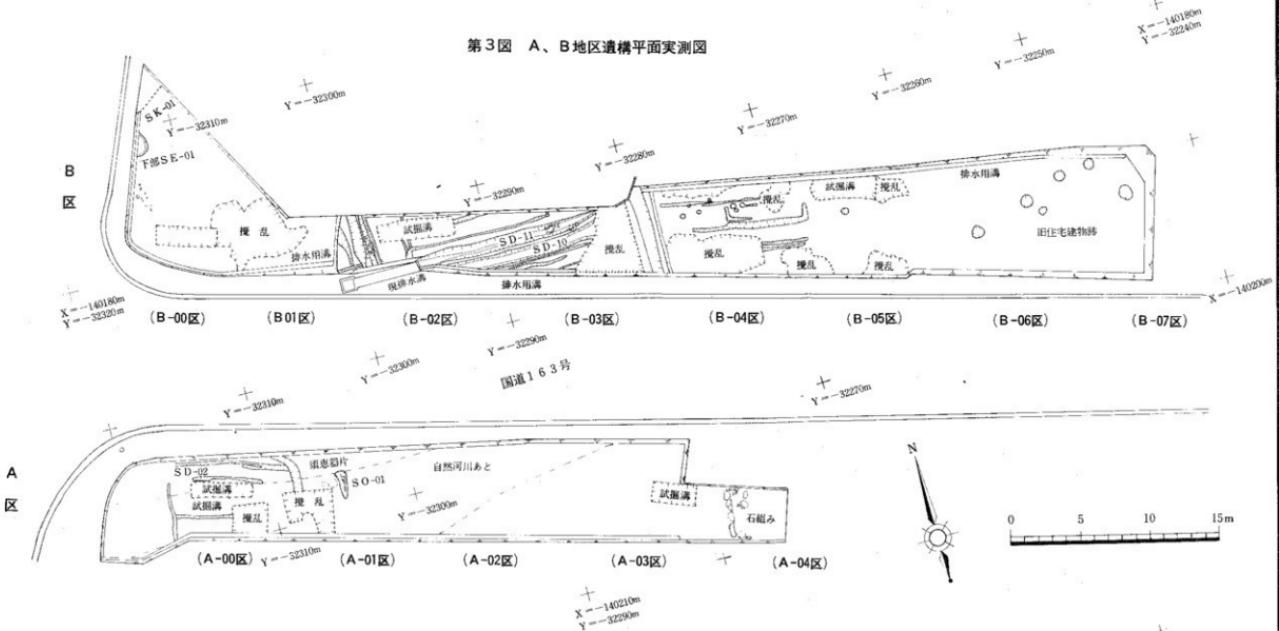
厚さ30~50cmの明黄褐色砂質土層で小礫を含み地山面と考えられる。

第Ⅶ層 黄褐色粘質土層で厚さ約20cmで、A、B両地区に認められる。

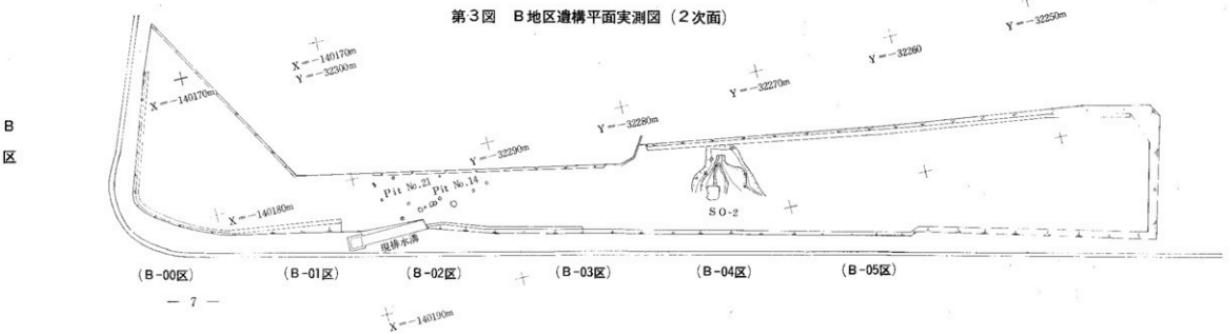
B 遺 構

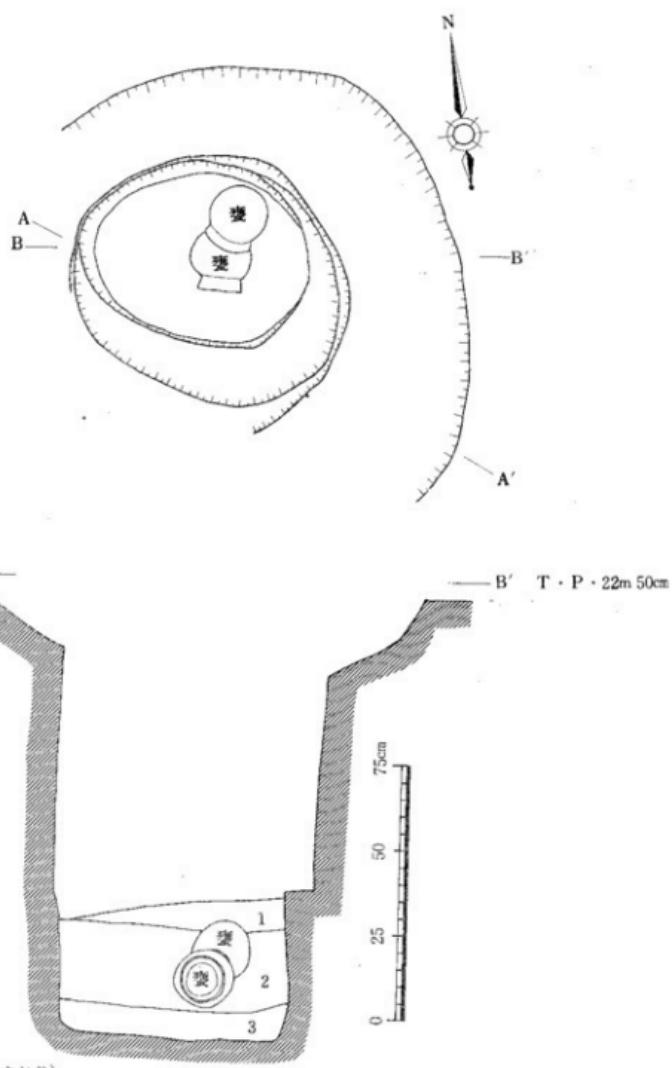
今回の調査において検出された主な遺構は、井戸(S E)、土壙(S K)、小溝(S D)、

第3図 A、B地区遺構平面実測図

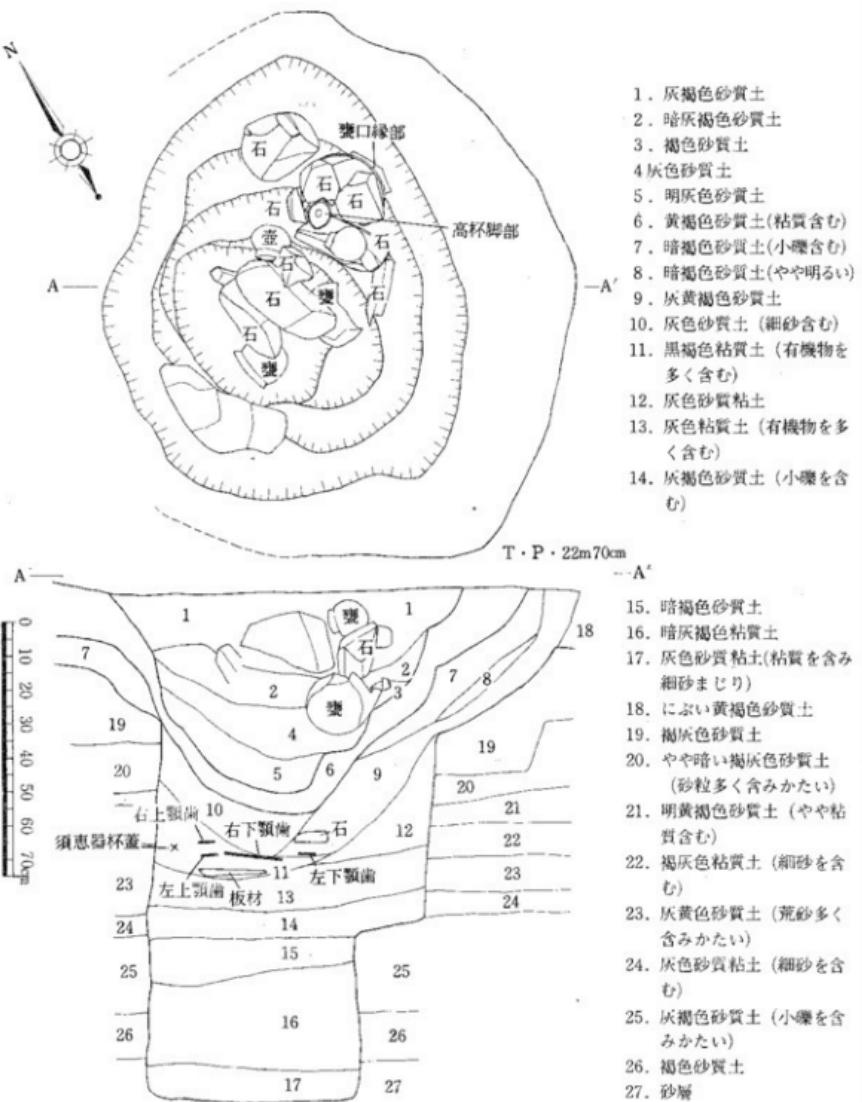


第3図 B地区遺構平面実測図（2次面）





第4図 井戸（SE-01）遺構実測図（B断面）



第5図 土壌 (SK-01)、井戸 (SE-01) 遺構実測図 (A断面)

石組み、掘立柱建物跡、自然河川等である。

井戸 (S E-01) (第4図)(図版-4・5・6)

B-00地区内で旧表土を掘削した時点で、T・P・23m67cmで土壤 (SK-01) を検出しが、更に掘り下げていく中で、土壤下部から素掘り井戸を検出したものである。

掘りかたは三段になっており、上部平面は長径130cm、短径120cmのほぼ円形を呈するもので、底径80cm、深さ26cmに掘り下げた後ほぼ垂直に約54cm掘り、さらに湧水部として小礫を含むかたくしめられた灰褐色砂層（粘質分を含む）褐色粘質土を抜いて、長径62cm、短径47cmの平面梢円形、深さ49cmに垂直に掘り下げ砂層にいたるものである。掘りかたの傾斜は南および東部がゆるく、踊り場的な役を設けているが、西部は垂直に近い。上部検出面 (T・P・22m35cm) から井戸底までは128cmである。

井戸内からの出土遺物は、井戸底部最下層堆積土、灰色砂質粘土層より梳の種5点、その上部暗灰褐色粘質土層より完形の土師器壺2点、井戸底部より65cm上の湧水部上面に板材、その上部5~8cmに馬歯（1頭分）が出土した。

土師器壺は1点は口頸部を南に、ほぼ水平に横たわり、1点はその壺の底部に口縁部を密着させた形で横位で出土しており、その為壺内に流入した暗灰色粘質土が水平位に約1cm程度堆積しており、上部は空洞となっていた。

なお井戸底部完掘時も湧水は殆ど認められなかった。

板材は長さ75cm、幅29cmの平面長梢円形で、板周縁は厚さ2cm、中央部は厚さ3.5~6cmのもので、約12cmの勾配をもって、長軸を東西方向にして、先端部は井戸側に接したかたちで出土した。

馬歯一いずれも頸骨の腐食がひどく殆ど土化していたが、上顎左右の臼歯、切歯1対が頸骨完植の状態で、歯部を南東にむけ横位に埋没しており比較的良好な保存状態をしめしていた。右下顎歯は歯部を上にし、切歯の頸骨部が上顎歯に接するかたちで北西方向に出土し、左下顎歯とは逆ハの字形に、歯部を南東方向にむけ切歯部を東北の方向にして、横位のかたちで出土した。また左顎歯の約2cm上には25cm×20cm×10cmの花崗岩がおかれ、下顎歯の出土した井戸中央部付近には、1~2cmの小空洞、蘇苔状の黒色有機物を含んだニカワ状の黒色粘質土が約10~20cmの厚さで認められ、頭部の腐食したものではないかと推定される状態であったが、頭骨、その他の部位骨は認められなかった。

また馬歯出土層下位から須恵器杯蓋片1点の出土をみた。

土壤 (SK-01) (第5図)(図版-3・4)

B-00地区で検出したSE-01の上部を厚さ5~10cmの粘質分の多い黄褐色砂質で内面をかためた土壤状のもので、検出面 (T・P・22m65cm) 平面は内径103cm×123cmの不整梢円形、深さ58cmの半球形を呈するものである

土壤内より土師器壺1点、土師器壺3点、土師器高杯脚部、須恵器甕口縁部各1点が出土したが、出土地点は土壤底部より上面にわたっていた。

また土壤内には約20cm～40cm大の11個の花崗岩が投棄されたかの如く出土し、うち6個は全体に火をうけて赤橙色を呈し、崩壊寸前のきわめてもろい状態であった。なお土壤内の埋土は火をうけた形跡は認められなかった。

溝（SD）（第3図）（図版-2）

A・B両地区内で客土整地された黄褐色砂質土層の第2層上面で検出したもので、いずれも中世以降の遺構と考えられる。

A-00、01地区内では3条の東西方向の溝と切りあって南北に走る溝2条、B-02、03地区内では東西方向に8条、南北方向に3条、B-04、05地区内では東西方向に7条の小溝を検出した。

A-00、01地区内の溝は深さ4～6cm、幅20cm程度で、ともに黄褐色砂質土が埋土されておりA-01地区内のSD-02で柳葉形石鏡の出土をみた。B-02、03地区内のSD-11は農業用水路として昭和期まで使用されていたもので、土留用の木杭、石組みが検出された。深さ40cm、上部幅70cmである。SD-10は切り合い関係からSD-11以前に使用された用水路と考えられる。深さ25cm、幅40cmである。その他の溝はいずれも深さ5～7cm、幅15～20cmの小溝であり、客土されたと考える中世以降の遺構である。埋土中から須恵器、土師器、瓦、陶磁器、砥石、サヌカイト片が出土した。B-04地区内の溝もいずれも深さ4～5cm、幅20cm程度の小溝である。

掘立柱建物跡（第3図）（図版1）

いずれも客土を取り除いた明黄褐色砂質土上面で検出したもので古墳時代遺構と考えられる。

B-02地区内では15個の柱穴を検出したが、建物の規模は確認出来なかった。柱穴の掘り方は径20～30cm、深さ10～24cmの円筒形で、pitNo14から土師器片、pitNo21から須恵器片の出土をみた。

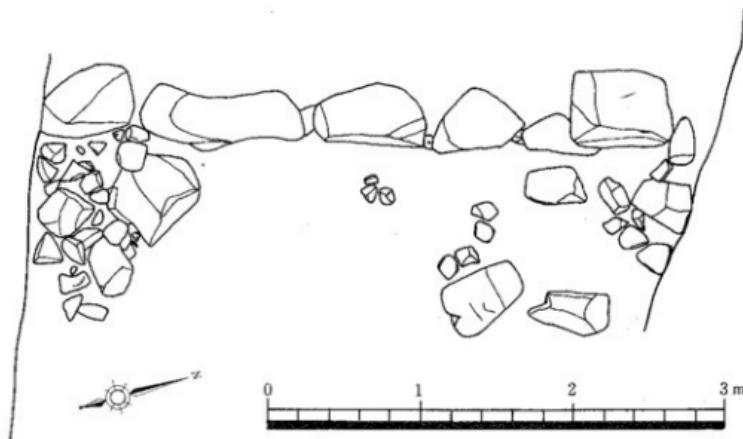
落ち込み状遺構（SO-2）（第3図）（図版-2）

B-04地区内で検出したもので、地区北側で2m幅で南に20cm落ち込む竪穴状を呈し、更に3.5m南では2.5m幅にわたって25cm落ち込むものである。落ち込み中央は南北方向に溝状にえぐられ、水流により削りとられた凹面がみられた。落ち込みには黄褐色砂質土（客土）が埋土されており、埋土および床面の灰オリーブ色砂層直上から土師器、須恵器、サヌカイト片が出土した。また斜面上に径10～18cm、深さ3～10cmの柱穴を6個検出した。

石組み遺構（第3図）（図版-6）

A-04地区は調査地東端で崖上に約3m東に落ち込む斜面となっている。石組み遺構は

斜面上段で検出した。100cm×30cm×23cm～30cm×25cm×28cmの花崗岩6個をN-15°-Wの方向に並べたもので、各石の東端を直線上にそろえ、石の間に根じめ用の小石が配されていた。調査地内では長さ5.2mを検出しさらに南に延びている。東側に同様の石が検出されたことから当時は二段積みであったと判断され、断面調査により2回目の客土が行われた時、崩落したものと考えられる。石組みをおおう黄褐色砂質土層より須恵器、土師器、瓦（三重弧文軒平瓦）、サヌカイト片を出土したが、石組み下部に黄褐色砂質土が約5cmの厚さで認められ、最初の客土時に石組みがなされたと判断される。



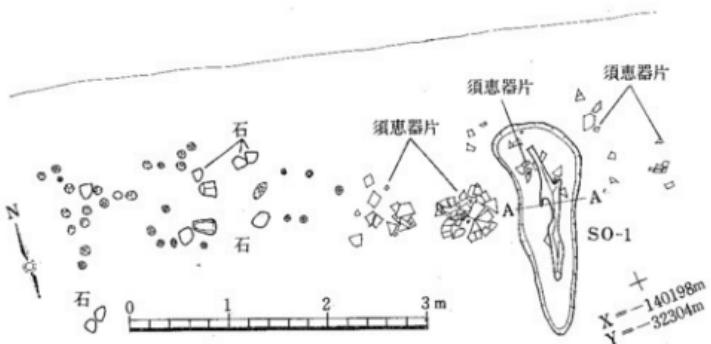
第6図 石組み遺構実測図

自然河川（第3図）(図版-7)

A-00～03地区内において、現地表面下1.5～1.8mで幅約4～6m、深さ20～30cm、断面はきわめてゆるやかな凹面をもつ流水のあとが検出され、比高差から東から西へ流路をとっていたことが確認された。底部検出面はT・P・22m70cmであった。

A-01地区内でこの流心部底面で南北2.1m、東西0.6m、東西の断面タテ26cmの平面卵形の寝袋状の落ち込み（S O-01）を検出した。上面は鉄化した黄褐色土でおおわれ、内部中央に長さ136cm、直径9cmの流木が流れに対し直角（南北方向）に青灰砂質粘土にまかれた状態で埋まり、木の下部の落ち込み状遺構の底面から須恵器片の出土をみた。これらから鉄分を多量に含んだ水流が、流木により対流作用をおこし、流木をとりまく形で寝袋状の落ち込みを作ったと想定され、しかも水量は少なくとも2～30cmがあり、長期間流

れていることを示唆するものである。なお流木の検出された地点より1~2m下流から客土の土圧により押しつぶされた状態で須恵器壺片1個体分が出土した。川底には20cm大の花崗岩が10個、木杭のあとが30個検出されたが、うち半数は掘り方より、南方に傾いて木杭がたっていたと判断されるものであった。



第7図 自然河川落ち込み（SO-1）遺構実測図

C 出土遺物

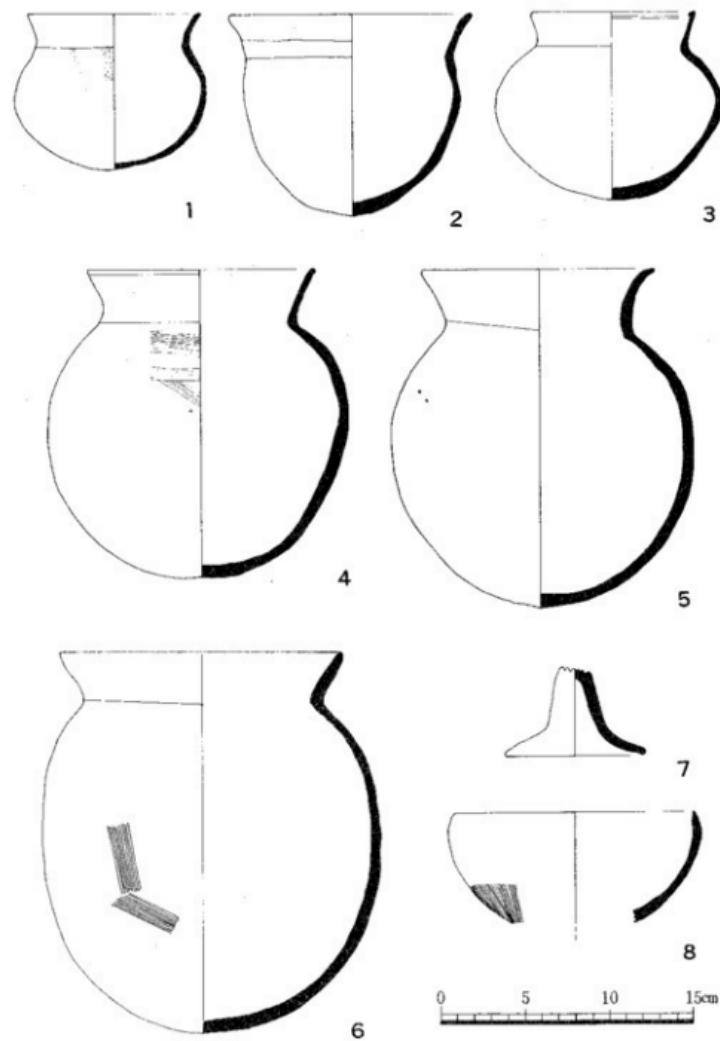
古墳時代の掘立柱建物跡、井戸、土壤状遺構、落ち込み遺構、自然河川、中世の溝、石組み遺構に伴なって出土した遺物は土器、石器、瓦、馬歯、桃の種子等である。土器は掘立柱建物跡からも出土しているが、いずれ小破片のみで実測可能な遺物としては井戸、土壤状遺構から出土した土師器壺5点、壺1点、高杯脚部1点、須恵器壺口縁部1点、杯蓋1点、落ち込み状遺構（SO-2）から出土した土師器塊1点、須恵器蓋杯3点、自然河川底より出土の須恵器大型壺1点である。

A 井戸（SE-01）内出土遺物（第8図-4・5、第9図、第10図）(図版-8・9)

土師器壺（第8図-4・5）(図版-8)

(4) 口径12.9cm、器高18.0cm、頸部径16.4cm、体部最大径17.7cm

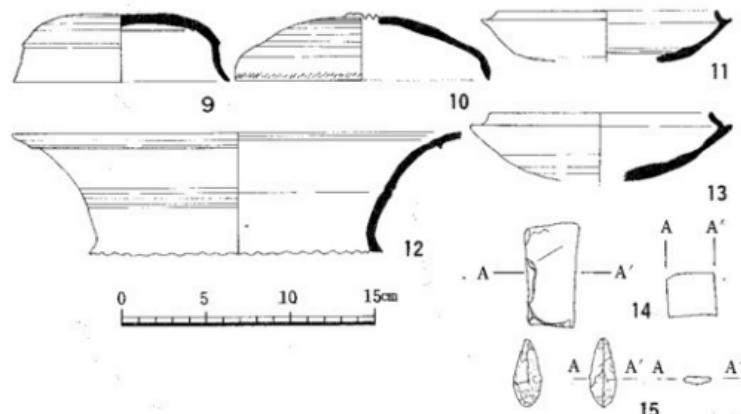
口縁部はややゆるやかに外反して上外方にのび、端部は丸くおさめる。球形の体部をもち最大径をもつ。底部は丸底である。体部内面の上部等は強い指ナデ調整を行ない、外面はクシメ調整、口縁部内外面はナデ調整を行なっている。色調は灰黄褐色で他の一括出土の土器の胎土とは区別されるものである。



第8図 土器実測図

(5) 口径12.7cm、器高19.8cm、頸部径10cm、体部最大径17.8cm

口頸部はやや外弯しながら上外方にのび、端部は丸い。頸部からゆるやかに内弯しながら底部にいたる球形の体部をもち、丸底である。体部内外面とも指オサエ後ナデ調整をほどこし頸部内面に鈍い稜がみられる。口縁部内面はハケ調整、外面はナデ調整を行なっている。体部の大半に煤の付着がみられ内面は平滑で黒ずんでおり、使用痕が明瞭に残る。



第9図 土器、石器実測図

須恵器杯蓋（第9図-9）

(9) 口径12.6cm、器高4cm、稜径11.6cm

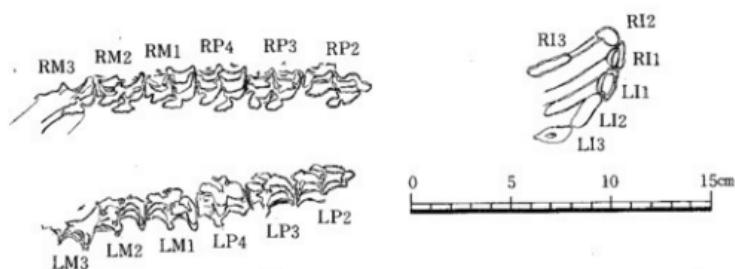
口縁部は垂直後、外反して下がり端部はわずかに内傾する平面をなす。稜は短かく鋭い。天井部は低く平らで、外面^{2/3}は回転ヘラ削り調整、自然釉をかぶる、馬歯と同一層より出土す。

馬歯（第10図）

上顎歯左右の前臼歯（P）6本、後臼歯（M）6本、切歯（I）6本、下顎歯右の切歯、前臼歯、後臼歯、左の臼歯の出土をみたが、保存状態は上顎歯のみであった。

上顎歯は土圧により若干の変形が考えられるが、顎骨完植の状態で出土したものであるが上顎骨の腐食が進み殆ど土化した状態であった。歯列はほぼ直線的でビビアナイトの付着は認められなかった。

上顎歯の後臼歯から前臼歯間は16.2cm（推定）、後臼歯から切歯間は30.2cm（推定）である。



第10図 馬上顎歯実測図

上顎歯の各歯冠長、歯冠幅は次の通りである。(一部推定)

部位名	記号	歯冠長(mm)	歯冠幅(mm)
右第1切歯	R I ₁	18.5	10.0
右第2切歯	R I ₂	18.0	9.0
右第2前臼歯	R P ₂	34.0	24.0
左第2前臼歯	L P ₂	34.0	24.0
右第3前臼歯	R P ₃	29.0	24.0
左第3前臼歯	L P ₃	28.0	25.0
右第4前臼歯	R P ₄	26.5	27.0
左第4前臼歯	L P ₄	26.0	27.0
右第1後臼歯	R M ₁	24.0	25.5
左第1後臼歯	L M ₁	24.0	26.5
右第2後臼歯	R M ₂	24.0	23.0
左第2後臼歯	L M ₂	25.5	24.0

B 土壌内出土遺物 (第8図-1~3・6・7、第9図-12)(図版-8・9)

土師器壺 (第8図-1・2・6)(図版-8)

(1) 口径9.7cm、器高9.1cm、頸部径8.2cm、体部最大径11.3cm

口頸部は上外方にわずかに外反しながらのび端部は丸い。体部は偏球形で底部は丸い。最大径を体部中央やや上にもつ。口縁部内外面はナデ、体部外面上半部ハケメ調整、体部内面上半部に1.5cm幅の巻きあげ痕が残り、外面は焼成時の黒斑がみられる。胎土は砂粒多く含み、色調はにぶい橙色である。

(2) 口径13.4cm、器高11.8cm、頸部径11.2cm、体部最大径12.7cm

頸部はゆるやかに屈曲して上外方にのび、口縁部でわずかに外反し端部は丸い。体部は半球形で底部は丸い。口頸部接合部を内外面ともに横2条に指オサエを施こし、口縁部内

面はハケメ、外面はナデ調整、体部外面は指オサエ後不整方向のハケメ調整、体部外面に煤の付着が多く、底部外面は胎土表面の剥離がめだつ。

(6) 口径16.7cm、器高22.4cm、頸部径12.8cm、体部最大径20cm

口頸部はわずかに内弯しながら上外方にのび端部は丸い。長胴形で丸底、口頸部内部は粘土を補ない指ナデで接合し、巻き上げ痕が明瞭に残る。体部外面は不整方向のハケメ、口縁部内外面もハケメ調整、体部外面のタテ半分は胎土内の砂粒の露出が目立ち橙色を呈する。残り半分は灰褐色の本米の色調をのこしている。

土師器壺（第8図-3）（図版-8）

(3) 口径8.9cm、器高11cm、頸部径8.0cm、体部最大径13.5cm

肩部よりわずかに外反し端部は内方へふくれ内傾する平面をなす。体部は偏球形で最大径を体部中央よりやや上にもつ丸底。体部内部は斜め上に指幅の凹面をもつ指ナデで器壁を薄く仕上げている。外面は荒いハケメ仕上げ、胎土は砂粒を多く含み色調は赤褐色。壺内に黒色のニカワ状の薄片の付着がみられる。水流にさらされた感じの土器表面の剥離が目立ち、砂粒が露出している。

土師器高杯脚部（第8図-7）

(7) 底部8.2cm、残存高4.9cm

杯部を欠く、ややふくらむ脚部は裾部で弯曲して拡がる。端部は横にナデられて面をなしている、色調は赤褐色である。

須恵器壺口縁部（第9図-12）（図版-9）

(12) 口径26.1cm、頸部径15.9cm、残存高7.9cm

口頸部基部は外反して立ち上がり、丸く鈍い円線をもとに形成した後外弯してよりやや上方に断面三角形の鋭い凸帯をもっている。いわゆる逆コの字形を呈するものである。口縁部内外面ともに丁寧なナデ調整を行ない、端正、シャープ、堅緻なつくりで5世紀後半に比定される。

C 落ち込み遺構（S O - 2）内出土遺物（第8図-8、第9図-10・11・13）

落ち込み遺構床面灰オリーブ砂層直上から一括出土したものである。

土師器壺（第8図-8）

口径12.8cm、現存高5.8cm

内弯する口縁、端部はかすかに外反する。体部下部外面に細いクシメ調整がみられる。赤褐色、細砂を含む。

須恵器杯蓋（第9図-10）

10 口径14.8cm、残存高3.5cm、口縁部高1.5cm

口縁部に下外方に下がった後内傾し端部は丸い。天井部はやや高く丸味をもつ。ツマミ

痕を残す。天井部³回転ヘラ削り、口縁部近くに細い刻み目を有す。斜面底部より出土。

須恵器杯身（第9図-11・13）

(11) 口径12.8cm、残存高3cm、たちあがり高0.6cm

たちあがりは内傾してのび、端部はうすくやや鋭い。受部は外上方にのび端部は丸い。底体部は浅く平らで、外面²回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整。

(13) 口径13.0cm、残存高4cm、たちあがり高0.8cm

たちあがりは内傾してのび端部は丸い。受部はわずかに外上方に短かくのび、底体部は浅く丸味をもつ。底部外面²回転ヘラケズリ他はナデ調整。

D 自然河川底面より出土（第11図-16）

須恵器壺（第11図-16）（図版-9）

(16) 口径21.2cm、器高46.4cm、頸部径14.7cm、体部最大径45.5cm

自然河川底部より客土の土圧により押しつぶされた状況で出土したものである。

口頸部は肩部から強く外弯してのび、口縁部でわずかに下外方に下がった後、内弯しながら上方にのび端部はやや鋭い。体部は下外方に下がった後、²で内弯しながら下がり¹で内下方にのび底部にいたる。底部はやや丸味をもつ。体部外面は平行叩き後カキメ調整、頸部外面は回転カキメ調整、体部内面は肩部から底部まで青海波タタキがみられる。

E その他の遺物

軒平瓦

三重弧文軒平瓦で厚さ3cmの破片である。創建当時の正法寺のものと考えられる。A-04区石組み遺構の黄褐色砂質土第2層下からの出土である。

石鐵（第9図-15）

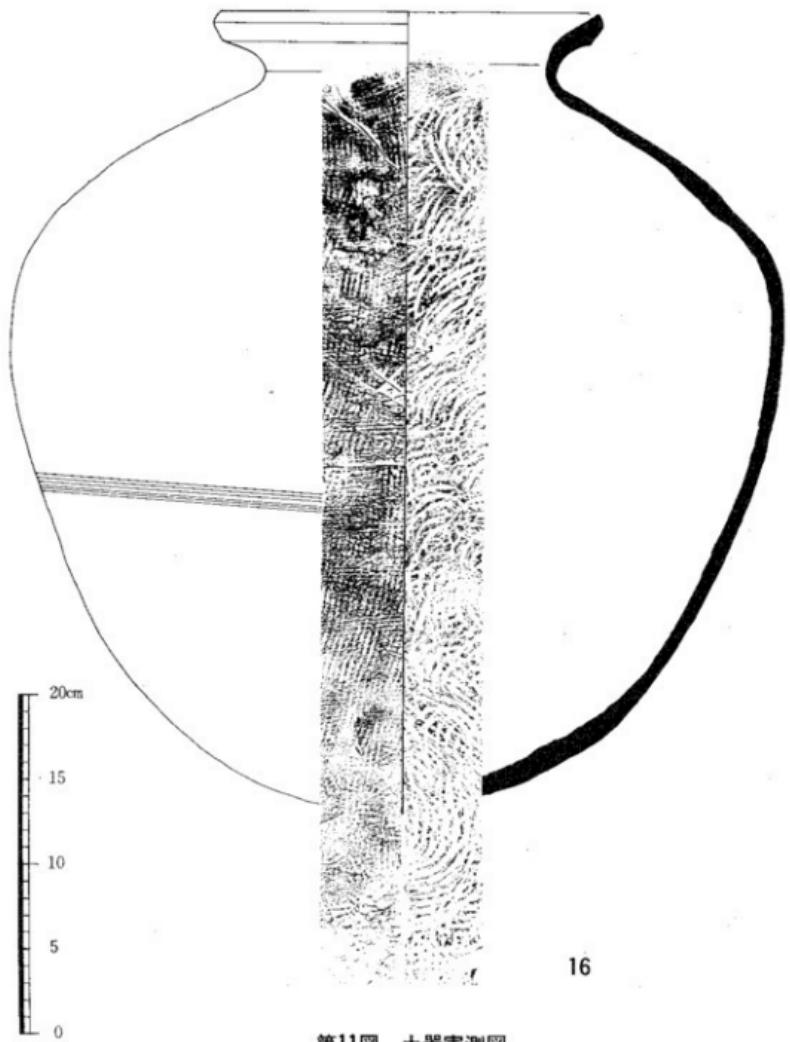
柳葉状石鐵で先端部欠損、現存長4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、A-0区、S D-2より出土。

砥 石（第9図-14）

砂岩製の砥石で粒子が細かい。4面ともに使用痕がみとめられる。長さ6cm、幅3cm、厚さ3cm。

桃の種子

殆ど腐食寸前のものでB-00区S E-01の底部より5点出土、長さ2~1.8cm、幅1.7~1.5cmのものである。



第11図 土器実測図

16

IV おわりに

今回の調査面積644m²の中で5世紀後半の井戸と土壙状遺構、古墳時代に比定される掘立柱建物跡、自然河川と、中世の小溝、石組み遺構が確認され、各遺構内から時代を決定できる各種土器等の出土をみた。

今回の調査区で検出した遺構遺物について中野遺跡での過去の調査及び周辺の遺跡調査結果を踏まえてまとめとしたい。

第1に今回の調査で検出したS E-01、S K-01では、井戸底部に桃の種子、底部に近い堆積土中に完形で、しかも使用形跡の明瞭に残る甕2点、その上位の井戸中段に長さ75cm、幅29cmの板材の上にのりかかる状態で北向きに頸部から切断したとみられる頸部（頸骨以外の部位骨は認めることが出来なかった）が投入された状態で出土し、その上に土壙状の凹みの中央部に集中して、完形の土器師壺、甕と高杯脚部と須恵器甕口頸部の計6点が焼石とみられる花崗岩6個を含めた20~40cm大の石11個の下におかれた状態で出土したが、井戸内の土器、土壙出土の土器類は土器編年からみて時期的にほとんど差はないと判断された。

土肥孝氏は「日本古代における犠牲馬」の中で、殺牛、殺馬の祭祀形態を天理市布留遺跡、神戸市吉田南遺跡の例をとり、古墳時代前~中期の豊饒儀礼の一端（すなわち殺牛、殺馬によって豊饒を祈る儀礼、耕作のための水不足をはらう儀礼）を表しているものと云えようとしているが、上例はいずれも川をはさんだ両岸、溝べり（溝中）とされている。本市に於ても同じ中野遺跡内の国道163号沿い南側道附近の調査に於て、大溝内より古式須恵器と共に馬の下顎が出土し、さらに今回の調査地の北150mに所在する奈良井遺跡でも一辺40mの方形周溝遺構の祭祀場を検出するとともに、周溝内から蒙古馬と見られる馬一頭分が長さ2mの板の上に横位の状態で埋葬されたもの及び頸部を切断して周溝内の土壙に埋葬されたものが出土している。このような周溝内での馬の遺存体の出土は祭祀跡の可能性を強く肯定されるものである。

今回の調査での馬齒の出土は井戸内であることは上記諸例とは様相を異にするが、本調査地は舌状台地ともいえる清滝丘陵の西端部に位置することから旱害時の祈雨祭祀又は豊饒農耕儀礼を行なう場所選定としては最適なところと考えられる。したがって本遺跡での井戸内での出土状況より次の想定が可能となる。

井戸完成後、若干の年月を経たある旱魃の年→殺馬→井戸底部に使用中の大切な甕を沈める→頸部を切断し、板で運び井戸に投入→埋土→祈雨祭祀→肉食による饗宴→土壙内に饗宴使用の土器、焼石を埋める。

第2に西に隣接した中野遺跡第九次調査地の平地部で検出した自然河川や大溝で、古墳

時代遺物として滑石製有孔円板・勾玉・臼玉・剣形石製品・手捏ね土器等の数多くの祭祀遺物の出土をみたが、今回の調査では滑石製品その他の祭祀遺物とみられるものの出土がなかったことから、平地部と丘陵部の古墳時代人の生活の様相に一線がひかれるのではないかだろうか。

第3にA-04地区の石組み遺構であるが、縄文時代～鎌倉・室町時代にわたる遺物が含まれている客土整地層におおわれた状況で、N-15°-Wの方向で検出したが、第9次調査でもほぼ同様の石組み遺構が同方向で、しかも同様の客土層中から検出されており、平行間の距離は53～55mとなる。中世に行われたと考えられる整地との関連で同時に造成されたものとみられる。

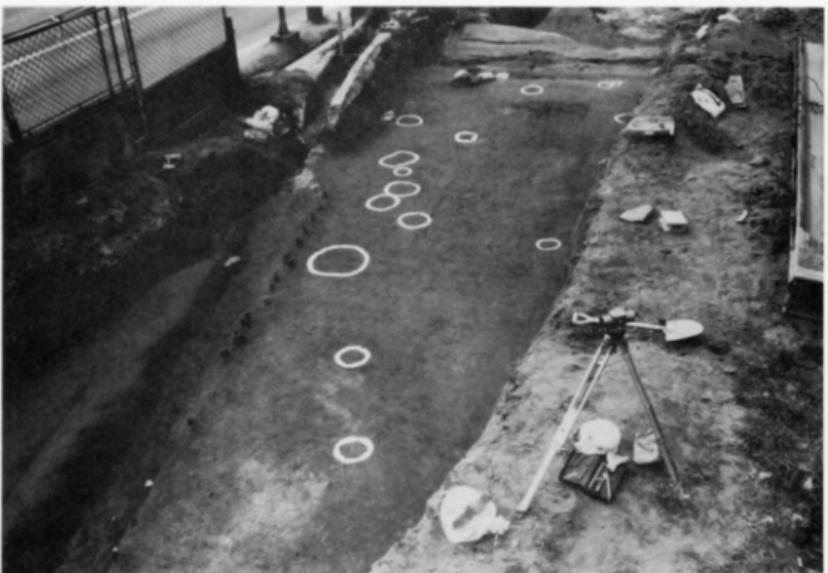
第4 客土整地層は殆ど全城で、30～50cmの厚さで認められ、須恵器、土師器の細片の他、奈良時代前期の創建時の正法寺の重孤文軒平瓦、黒色土器、石鐵等が多量に包含されていることから、広範囲にわたって中世において整地客土されたことが確認されたとともに、上方つまり東側にかけて縄文時代～中世の遺跡の存在を意味するものであり、今後の調査に期待をかけたい。

図版1

A地区調査前全景



B-02地区ビット群



図版2

B-04地区溝（一次面）



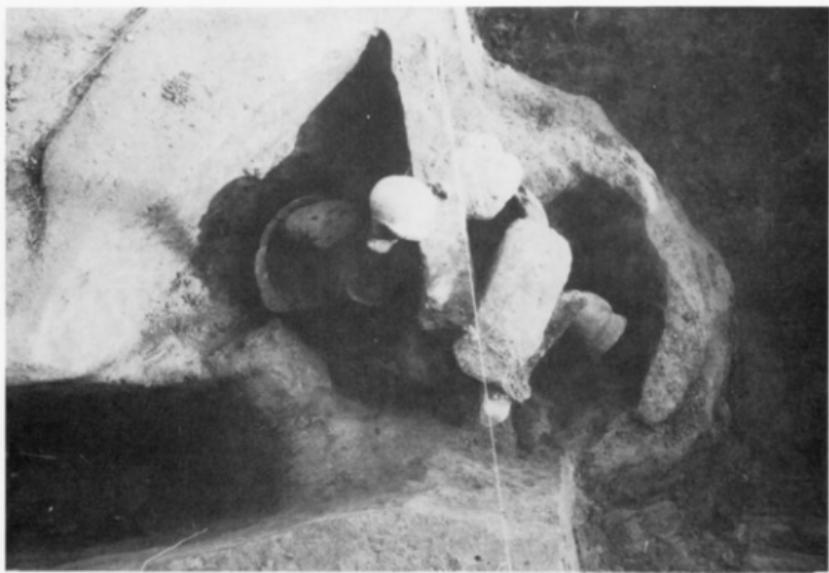
西から

B-04地区S-O-2（二次面）



南から

図版3
B-00地区 SK-01土器出土状況



同上



南から

図版 4

B-00 地区

SK-01 断面



B-00 地区 SE-01

馬歯出土状況



左 上頸歯 右 下頸歯



上 上顎歯、下 板材



上顎歯

図版 6 B-00 地区 S E-01 土器出土状況



A-04 地区 石組み遺構出土状況



北から



東から



同上 土器出土状況

図版8 遺物写真 土器I



1



2



3



4



6



5



12



16

中野遺跡発掘調査概要・V

昭和63年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

〒575 四条畷市中野本町1-1

印刷 有限会社高辻文具 印刷部